

ふるさとの恵み

高橋節郎



信州の友人から氷餅が届いた。餅米の粉と砂糖で出来ており漆の小椀に入れて熱湯を注ぐ。クリーム状にしてから口に入れて味わううちに私の目の前に北アルプスの雄姿が広がってくる。そして麓の安曇野の郷が流れはじめなのだ。田園を過ぎる爽やかな風に緑の稲穂が揺れ、いっばいに張られた水がきらきら光る。山からの清流の音がきこえてくる。夜空の満天の星が……。側に置いている鉛筆や筆が走りはじめ。こうして味覚からも私の作品は生まれてくる。近頃はレリーフに挑戦しているけれども発想はいつも天空広く風光豊かなふるさとからだ。生を受けて90年、からだ中五感がふるさとを覚えていくようだ。

昨年、安曇野穂高町に私の生まれた家屋敷や庭園も公開して静かな佇まいの中で四季の移ろいをも楽しめる安曇野高橋節郎記念美術館が開館した。今頃の庭は松やひば、つつじの木に青々と緑が茂り庭全体が若々しい生命力にあふれていることだろう。前面には北アルプスがそびえて。

この夏は私の若い時分の作品を集めた企画展が開催される。創作の原点となっているふるさとの地で作品の数々をみられること、自然の恵みをいっばい感じながら作品と向き合えることは幸せである。そして何より安曇野の自然の美しさ、力強さの中に身を置くことで更なるエネルギーをもらってることができるとだ。車椅子で3時間弱の行程ではあるが。

昨日は美術館友の会の方々が館庭の草とりをしてくれたとのことと有難く感謝、感謝である。

(2004年7月1日号)

たかはし・せつろう 1914〜2007年、長野県生まれ／漆芸家、文化勲章、文化功労者、日本芸術院会員、日展顧問

めだま焼きと私

桜井 寛



高島屋でのグループ展のことである。私はめだま焼きの絵を初めて出品した。その会期中のある日、美術部の人がおもしろい話をしてくれた。

「子供が先生の絵をじっと見ていて、めだま焼きのところをそっと指で触っていました」

と、そんな話をしていると、また子供が入って来た。

「あの子もぎつと触りますよ」

と言ったとき、子供は絵の前に立ちじっと見ていたが、そっとめだま焼きに触ったのである。

考えてみると私は、今までどれだけめだま焼きの絵を描いてきたことか。めだま焼きはおいしくて、可愛らしいからだろうか。多分、戦中戦後の私達には卵はなかなか口に入らなかった。その欠乏感が、今、私にめだま焼きの絵を描かせているのである。

ある夏の夕方、アトリエの裏のすももの木に「何か白い塊が枝にかかっている」と妻が見つけて言うので、行ってよく見ると白い塊は鶏であった。

この迷子の鶏はとても人によく馴れていて、前から私の家に住んでいるような顔をして昼は庭で餌をあさり、夜はフェンスに止まって眠った。驚いたことに庭のあちこちに大きな卵を生むようになった。

そんなある日、私が門の外へ出ると、鶏もついて出てきた。それを見つけた隣の仔犬が勢いよく走ってきて、ふざけたような感じで鶏にとびかかったのである。すると鶏はびっくりして、小さな子供のように私の後ろに隠れたのである。

可愛かったその鶏もたくさんのお卵をお礼に、農協の果樹園の飼育場に引き取られて行った。モチーフのめだま焼きを焼くたびに、私について歩いたあの鶏のことを思い出す。

(2005年8月21日号)

飛べないチーズ

小杉小二郎



東京行の搭乗案内が流れたので、いつもよりずっと重い手荷物を抱えて税関に向かった。半年振りに訪れたパリからの帰りである。

40年近くこの国の絵具やカンバス地で仕事をしてきた習慣からまだ抜けきれずにいる、当分は画材を買い漁りに時々渡仏するしかないなどか思いつつ、検問の長い列に並んだ。

今回の渡仏は絵具類だけでなく、来秋に並木通りの画廊とする作品展での立体作品用に蚤の市を歩き回って、これというモチーフを掘り出すという楽しいおまけがついていた。

運転手をしてくれた友人は「これ、お金出して買ったの？」と呆れたが、年代物の新聞紙やらガラクタ市のゴミ箱にあるようなまで掻き集め、トランクに無理やり詰め込んでの帰国である。立体は面白い、私にとっては一本の錆びた釘が発想の出発点だったりする。

ごく短い滞在だったのでキラ星のレストランは断念、その代わり日本では入手しにくい超美味なチーズを思い切り買い込んだ。

かなり重かったがトランクはもつと重い金属製のモーターフで満杯である。あれを手荷物にすればブザーが鳴って徹底的に調べられる。

で、チーズは手荷物に。重さの分だけ楽しみも膨らむ、既に心はワインセラールにあった。

ところが手荷物を開けた税関員は小躍りして喚声をあげチーズを没収するではないか！

不覚にも「軟かいチーズはテロ防止上機内持込み禁止」というのを忘れていたのだ。

「ほら、軟かいと刃物とかも隠せるから」と肩をすくめ根刮ぎ撤去。

地団駄より四股を踏んでルンルン気分の彼らから我が愛しのチーズを奪回したかった。

(2009年11月11日号)

美術のアスリート

十一代大樋長左衛門（年雄）

歴史を学び、過去をリセットしながら自らの生きる時の証を残す。アートの世界は、このことの繰り返しかもしれない。初めて概念を創り出したパイオニアは偉大だ。そして、その足跡は奥義や秘伝となつて、子孫へは「一子相伝」、弟子などへは「完全相伝」となつて伝承概念が生まれていった。

絵画における「琳派」「狩野派」には思想の違いがある。琳派の創設者である本阿弥光悦は、一子相伝である樂家と出会い、後世に残る樂茶碗を多く残している。当時の侘び寂びの思考は、千家から学んだに違いない。その後「琳派」は「完全相伝」、「狩野派」は「一子相伝」として互いを意識しながら、長い歴史の中で名画を残していった。

今、この原稿を書きながらだが、テレビではライブで冬季オリンピックが放送されている。期待された浅田真央選手は、ショートプログラムで転倒。解説者もアナウンサーも絶句。採点では技術点、芸術点、その得点結果は実に細かく公平なものだ。彼女の實力からすれば、有り得ない残念な結果となった。想像を絶するプレッシャーがあつたに違いない。

アスリートの世界に加齢は厳しいものがある。しかし、40歳



を超えたメダリストもいれば、若干15歳のメダリストもいる。また、オリンピック競技のルールは、その都度改正されながら理解されやすいように進化していく。そして、アスリートは多くの人々に支えられている。これがオリンピックなのだ。

今、日本は文化を含めその尊厳を失いつつある。新聞、テレビ、それに加えてネットからの情報は、誹謗中傷、売国的なニュースも飛び交う。一つの事件でも何が正しいのか、我々には判らない。「今の教科書には、正しい過去の歴史認識が書かれていない」そう告げられるとそれが正しいものと皆が判断してしまう。正しいと思えるが、主張する人の中には、実際に今の教科書を読んでいない人もいる。勿論、私も学習は足りていない。

そして今、美術公募展の在り方も問われはじめた。「作家が審査をするのはおかしい」などの社説も読んだのだが、それだけでは作家の心が傷つく内容も多く含まれている。しかし、規則やシステムは時代と共に変わらなければならぬことも事実だ。オリンピックでは審判員のほとんどは選手経験者、または深く関わった人しか出来るはずがない。工芸の領域で、先輩作家が若い作家にアドバイスし、時に審査するのも何も問題はないのではないだろうか？ 公募展は技術点、芸術点などを公開しながら審査されることは難しいかもしれない。全く同じ方法は不可能であっても、これからの公募展には、改革出来るヒントとなるのかもしれない。

オリンピック、そして私が志している「工芸」「陶芸」は類似している気がする。選手は作家、コーチは師匠。師匠は審査員になることもあるだろう。競技場は展覧会場であり、年齢を超えて強い人がメダリストなら、展覧会において実力作家が落選、受賞者が若い作家となる場合もあるだろう。

オリンピックから学ぶ事は多い。選手は自らの実力を公開の場で試す。我々作家も欧米のように公開制作（ワークショップ）として、自らの作品を証明することが必要となるかもしれない。

冒頭に触れた、本阿弥光悦が樂家と出会い生まれたアート。美術のアスリートが「一子相伝」との出会いから秘技を見つけ、「千家」は茶道のコーチ的存在として、精神の拠り所となったのは「大徳寺」だったかもしれない。今のオリンピックのようなキヤスティングが揃っていたのだ。

人が生きる間の出会いは大切だ。何を信じるか。自らをどのようにジャッジするか。生まれ、そして去って行く、その繰り返される歴史の真ん中に自らがいる。光悦には作品でしか出会えない。しかし、我が道の恩師である奥田元宋画伯、勅使河原宏家元、これらの美術アスリートともっと話がしたかった。

(2014年3月1日号)

じゅういちだいおおひ・ちようざえもん(としお) 1958年石川県生まれ/美術家、ロチェスター工科大学客員教授、日展会員、国際陶芸アカデミー(IAC)会員

瀬島 匠



中学のとき、太宰治の『走れメロス』を読み心の底から感銘を受けた。自分の命よりも大切な物の為に何が何でも走り抜かねばならないメロスの走り。走るにも色々あるが、流れる雲や、繰り返す押し寄せせる大海の波も、杖をついた老人の歩みですら、前に進もうと踏み出す物はすべてランナーではないかと、年を重ねる度にそう思えるようになって来た。

マラソンランナーの宗兄弟のインタビュの中で「マラソンと言う大変過酷な競技を続けられたのは、どうしてでしょうか？」と言う質問に答えて「それはお酒と同じですよ。飲むだけ飲んで、次の日の二日酔いのつらさの中で、もう二度と飲まないようにしよう!と思うのですが、気がつけば、また今日も飲んでる。走るとはそんなもんですよ」。何故かこの言葉が最近一番自分にはしっくりくる。

仕事では車で、関東と東北を移動する日々が続く中、東京はもうすっかり桜の花が散ってしまった頃、先日勤務先の山形にやっと桜の花が咲いた。驚いた事に向かいの梅の花も同時に咲いている。先週は山形から栗子峠を越え、福島に入った途端、川沿いの桜の木々は満開の花で覆い尽くされ、視界の果てまで埋め尽くされていた。

土地土地で様々な桜はあるけれど、自分にとってのイメージは故郷瀬戸内の穏やかな海を背景に、菜の花と一緒にそっと咲く桜を思い出す。

(2015年5月1・11日号)



「寝るトフチ」

去年のクリスマス、左腕が痺れて脳神経外科へ行った。事前にネットで調べると思い当たるのが二つばかり、どちらも一生付き合っただらねばならぬ気の滅入るようなものだった。案の定、MRAを撮ることになり棺桶のような機械が滑り出した途端後悔した。20年近く忘れていた閉所恐怖症が出たのだ。壁を叩いて「出して下さい」と叫んだが全く届かない。「今から13分、続けて25分撮影します」。マイクを通して技師のくぐもった声が響く。気が遠くなった。

結果は異常なし。「あとは筋肉疲労ですね、絵描きさんは左手使いますか?」「パレットは持ちますが……」と答えながら13歳になる雄猫が左腕を枕に寝るのを思い出した。重たいし寝返りも打てないので外そうとするとニャーと抗議する。せめて反対側にと抱えてもまたニャーと怒って左に戻る。一段と冷え込みが厳しくなったここ数日、そんなことを繰り返していた。

「大いに可能性ありますね」医師が口を開いた。長時間同じ箇所を圧迫すると痺れが取れず完治まで数ヵ月かかることもあるという。ちゃんとした病名もあるが男性に多く、原因から俗にハネムーン症候群と呼ばれるそうだ。頭の重さが5キロ程度と聞き合点がいった。痩せかけて拾ったのを不憫に思っただけ食べさせたら今では5キロを超える大猫になった。疲労回復に効くからとビタミン剤をもらい、礼を言っただけ病院を出た。

今年もまた、猫が布団に潜り込む季節になる。

(2016年11月1日号)